

## 故小林平八先生を偲んで

体育学部教授 大 内 敬 哉

昨年4月10日に急逝されました、小林平八先生に、同期の桜として、ここに拙文を捧げ、心より哀悼の意を表します。

先生とは、体育学部創立時である昭和34年4月に奉職し、爾来39年間に亘り、同僚として、又よきライバルとして今日まで共に過ごしてただけに、先生との思い出は格別なものがあります。

先生は就任以来、体育学部の教育にその情熱を傾注され、特に専門であった、バスケットボールに対する授業及びクラブ活動の指導は、今も私の脳裏から決して離れることはありません。当時、大学の体育館は一つしかなく、授業後のクラブ活動は、卓球部、体操部、バスケットボール部の3つのクラブが時間を分け合って使用していました。バスケットボール部は、連日夜の九時過ぎよりの練習であり、深夜に及ぶ毎日でありました。その練習の厳しさは、誰れにも真似のできない熱心さでありました。「練習は遊びではない。生命をかけて行え。」これが先生のスポーツに取組む信念でありました。この信念が後に、東海インカレの28連勝や、平成9年度、インカレ4位という輝かしい成績を残されたのであります。

先生との思い出はたくさんありますが、その一片を記します。

### (一) マラソン大会

中京大学に就任した2年後のある日、梅村清明学長（当時）に、小林先生、金沢先生、そして私の3人が呼び出しを受けました。それは八事学舎のある、名古屋市昭和区で開催される“昭和区一周マラソン大会”に「若い実技専門の先生がたくさん就任されましたから、梅村学園チームとして参加したく思う。これがメンバーだ。必ず優勝しなさい。」という話しでありました。そのメンバー表には、陸上部関係の、梅村清弘先生（現総長、理事長）、堀尾先生（中京高陸上部監督）、徳弘先生（中京大サッカー部監督）、小林先生、金沢先生、私、の6名が記入されておりました。又第一区スタートには小林先生、第六区のアンカーには私の名前がありました。小林先生がマラソンに強いことは聞いていましたが、大会当日は特別に強く、第一区は断然1位でありました。然しアンカーの私がゴール手前100mで追い抜かれ、優勝ができませんでした。その時小林先生が「なんだ！ 仕方がないなあ……。」と言われたあの一言が、誠に申し訳ないことをしたと、今も思い出します。翌年も同じメンバーで参加し雪辱を期しましたが優勝はできませんでした。小林先生はスタートで勿論1位でありました。

### (二) 病気、入院

先生は若い時より、非常に健康であり、誰れが考えても病気で入院されるとは夢にも思いませんでした。確か、平成元年の9月過ぎであったと思いますが、先生が入院されたことを聞き、最初の見舞いに、金沢先生が行かれ、その様子を聞いて、私が出掛けることになりました。金沢先生の報告は、「私と小林先生の奥さんの2人で入院を説得したけれど、入院は絶対にしないと聞き入れないので困ったことである」と言う話しでありました。私も先生を入院させる自信はありませんでしたが、何とかしなければと思い病院へ出向きました。先生の頭の中は、自分の入院により体育学部の授業に迷惑を掛けることは絶対できないという理由でありました。あの、人一倍強い責任感と信念を持っている先生に、普通のことでは入院の説得はできません。私は、理性を忘れ、病院内に響き渡るような大声で「病気で入院するのが何故学部に迷惑が掛かるのか、お前が学部に来た方が、もっと迷惑だ。」と怒りました。あまりの声の大きさに私自身もびっくりしました。「分かった。」と先生が答えてくれました。この件が後に、「大

内がおれに怒った。」という評判になりました。然し、私は今でも先生がよく納得し、入院してくれたなあと、感謝いたしております。

今先生を偲ぶ時、あの人なつこい微笑みを浮かべられた顔が彷彿として思い出されます。60才という人生の半ばで生涯を終えられた先生は、さぞ無念であったと思います。まだまだこれからのご活躍を期待いたしていましたのに残念でなりません。情に厚く温厚で明るい性格の先生が、スポーツの情熱を最後まで生命をかけて尽くされたご指導は誠に立派であったと思います。平成9年度インカレには、ドクターストップを押し切り、チームを指揮され、最後の最後までバスケットボールに情熱を燃やされた先生の生涯は幸であったと思います。

ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。